# Artist -Initiative Links in 1999 "Puddles "シンポジウム趣旨

欧米ではこれまでの美術館や商業ギャラリーと異なる立場で、アーティストが自主運営する非営利の文化・芸術活動組織が広がりをみせている。日本でもいくつかの組織が活動しており、アート・シーンのなかで、その役割が期待されている。

このシンポジウムは、「アーティスト・イニシアティヴ・リンクス1999／パドゥルズ」の一環として実施され、アーティスト・イニシアティヴの活動とは何か、各組織の活動報告や参加アーティストのレジデンス体験にもとづいて紹介する。加えて、この活動が今後、芸術や社会に及ぼすであろう、新たな胎動や可能性、あるいは課題点を様々な角度から検証する。

## ● シンポジウム 1

日時　1999年8月28日（土曜日）16:00-18:00
会場:ドトールコ　ヒーショップ岩本町2丁目店　（参加者40人）
東京都千代田区岩本町2-8-15
主催　ICAEE/国際現代美術交流展実行委員会

パネラー：シドニー・ドラム(参加アーティスト/55マーサー)、伊藤洋介(参加アーティスト/55マーサー)、浜田剛爾(アーティスト)、若林幹夫(社会学)、酒井信一(ICAEE代表)、司会/天野一夫(O美術館学芸員)

会場風景

## ○ テーマ　「アーティスト・コーポレイティヴと都市形成」

シンポジュウム1では、ニューヨーク・ソーホーの発展において先駆的な役割を果した、５５マーサー・ギャラリーの活動と、日本での国際交流やレジデンス活動について、その当事者による報告をもとに、芸術活動が都市に及ぼす影響、あるいは都市空間が芸術にもたらすものとは何かが考察された。都市と芸術の関わりについては、芸術の様々な活動が都市空間に堆積する様々な記憶を覚醒させ、多重性としての都市/コミュニケーションの場へと変化させる。さらに、そうした環境が翻って芸術を活性せる活力となっている。したがって今日都市空間において、芸術は個人的動機に基づくものでありながら市民社会の発展に不可欠な公共性へのアイデンティティとして機能している。また、市場経済に見られる一元的なグローバリズムに関しても、単に拡大と集権を進めるのではなく、ローカリズムとの均衡をどのように考えるかが問題とされた。ローカルの再発見にとって地域社会と国際社会がダイレクトに切り結ぶための交流が必要であり、その理解を促す意味においても、アーティストの自立、交流を行なうアーティスト・コーポレティブの重要性が再認識された。

議事進行
1.パドゥルス概要の説明　伊藤　2.５５マーサーの紹介（伊藤、シドニービデオ参加）3.ICAEEの紹介　酒井　4.全体討議
5.質疑応答

パネラー各氏の発言要約

－浜田：
廃校＝学校－地域社会の中心であったものがアーティスト教育の場に変わる。＝戦前から戦後にかけての義務教育へのノスタルジー－原体験としての空間。アーティスト　イン　レジデンス＝中心からの逃避、周辺性としての（中心の批判）。
マネージメント（当局との交渉も含む）＝問題を先鋭化させるほど、困難さが顕在化する＝戦術としての連帯。
芸術のあり方＝社会構造上の問題として　アートをとらえる－言語、制度批評としての芸術＝「表現」の停止。
グローバルと差異＝差異はグローバル社会に搾取されるかたちで現れる。
－若林
都市と芸術の関わり合いについて－市民社会＝公共性・市場性　国民性の三重構造公共的な領域の社会的な領域による侵食、芸術の産業化　市場化。通俗化と専門化。近代における芸術家の矛盾＝芸術家は、自らの内的な霊感の表現である芸術を　公衆に向けて提示する主体であると同時に、資本制経済の中で生きる生活者でもある。その表現の領域においては、いかなる権威にも従わない自立的な存在たろうとする一方で　現実的にはその作品を市場においてなんらかの形で商品化せざるを得ない。だが、それが完全な形で市場における商品となるとき　芸術は芸術たりえなくなる。
「情報」としてではなく　共に在るコミュニケーションの場で生成するものとしての芸術の場の必要。公共性の空間としての都市的な場をどう作り出すか。
グローバルネットワークと都市との関係＝都市というメディアとしての場所と　非場所的なメディアを接合することによって　都市的な場をあらたに活性化すること。都市的な場所を「情報化＝商品化」の波から守り　市場化し、情報化する都市の中に、公共的なコミュニケーションの空間を作ること　グローバルなネットワークのなかで都市というローカルな場所の意味を再構築することが、現代における都市の課題の一つ。
-伊藤
アメリカについて　アメリカからの逃避、グローバル＝アメリカ化に対する戦略として　まさににその只中で逃避、ローカル化すること。アメリカ的なものはいたるところにある。物理的逃避では解決しない。
グローバル/ローカル　グローバル/ローカル、社会性/公共性（アレント）　新たなコミュニズムに向けて　それぞれのネットワークのレイヤー化、立体化。グローバルとローカルの間に注目すべき。
層としての都市、層としてのアーティスト都市的な場、レイヤー空間の実現、アーティストそのものが都市的であり　レイヤーであること。つまり　さまざまな様相を個人のレベルで引き受けること。
プロジェクトのパラドクス　都市の小さな隙間を利用しようとすることはすなわち、その喪失を意味する。つまりそこは「隙間」ではなくなるわけで　より大きなものに向き合わざるを得ない。当局、体制、国家

## ● シンポジウム2

日時　1999年9月12日（日曜日） 14:00-16:00
会場　大阪府立文化情報センター　　多目的ホール（参加者100人）
北区中之島3-2-18(住友中之島ビル5F) TEL 06-6444-1011 地下鉄肥後橋駅すぐ
主催　CAS　後援：大阪府立文化情報センター　助成　　ドキュメント2000プロジェクト
パネラー　伊藤洋介(参加アーティスト/55マーサー)、川端嘉人(Clean Brothers)、樋口よう子（モダンde平野）、笹岡敬(CAS代表）ほか

### ○ テーマ：「ノン・プロフィット活動の可能性」

シンポジウム2は、街の中にアートを持ち込むモダンde平野、ビルの清掃を行うことを条件に若手アーティストたちに共同アトリエとショーケースを与えるClean Brothers、ボランティアによる開かれた運営を行うCASなどユニークな活動が生まれている大阪の状況と55マーサー/ニューヨークの活動を例証にしつつ、これらの非営利活動の社会的役割が検証された。主に活動展開の可能性とそれを維持・運営してゆく際の様々な諸問題が話し合われた。

議事進行
活動報告
1.バドゥルズ、55マーサー伊藤、2.クリーン・ブラザーズ川端、3.モダンde平野　樋口　4.CAS笹岡敬　5.全体討議　6.質疑応答

会場風景

## ● シンポジウム3

日時：1999年11月20日（土曜日）16:00-18:00
会場:ドトールコーヒーショップ岩本町2丁目店　（参加者80人）
東京都千代田区岩本町2-8-15
主催　ICAEE/国際現代美術交流展実行委員会　後援: 国際交流基金
助成: 東京国際交流財団
パネラー　リザベト・ビック(デュエンデ代表)、ヨス・ヴァンデポル(参加アーティスト/デュエンデ)、天野豊久(参加アーティスト)、浜田剛爾(アーティスト)、中瀬康志(アーティスト/フィールドワーク・イン藤野代表)、酒井信一(ICAEE代表)、司会/堀元彰(神奈川県立近代美術館学芸員)

### ○ テーマ　「アーティスト・イニシアティヴが芸術と社会にもたらすもの」

総合的なアーティスト・イニシアティヴの活動をオランダで展開するデュエンデの紹介と、今回のシンポジウムに参画したアーティストの活動やレジデンス体験をもとに、その意義と可能性について語り合われ、その上で、今後の"バドゥルズ"の活動の展望が討議された。今回のシンポジウムは、ICAEE主催のもとでパネラーを招集し、当日は東京を拠点とするアーティストグループ「W³（ダブリュー・キューブ）」のメンバーおよびボランティアが会場の運営などを行った。

議事進行
活動報告　1.デュエンデ　リザベト・ビック+　ヨス・ヴァンデポル　2.フィールドワーク・イン藤野 中瀬　3.ICAEE　酒井　4.参加アーティストとして　天野　5.全体討議　6.質疑応答

今回のシンポジウムは、オランダ、ロッテルダムを拠点とするアーティストイニシアティブ「デュエンデ」の代表であり、東京での滞在制作と作品の発表を行ったリザベス・ビックとヨス・ファン・デァ・ポルの他、ICAEE代表の酒井信一、フィールドワーク・イン・藤野の中瀬康志、W³のアーティストで９月にオランダでの滞在制作と発表を終えた天野豊久をパネラーとして迎え、各組織の活動を紹介し、また、アーティスト・イン・レジデンスでの体験を報告しながら、アーティストイニシアティブが芸術や社会に及ぼす可能性について検討をし、将来に向けたビジョンを話しあった。

９月に「アーティスト・イニシアティヴの可能性についてムが、デュエンデで開催されており、オランダと日本のアーティストを取り巻く環境の差異や、アーティスト・イン・レジデンスによる国際的なアーティストの交流がもたらす効果などが話し合われた。また、今回のシンポジウムは、そこでの討議を引き継いだ形となっている。また、前述したパネラーの他、司会に神奈川県立近代美術館学芸員の堀元彰が、通訳にはボランティアとして神吉乃三巳、尾崎旬が当たった。

会場風景

## ○ シンポジウム当日の経過

11月20日、午後３時より、会場近くで、「リザベス・ビック＋ヨス・ファン・デァ・ポル展」の開催されている、ギャラリーサージに於いて、パネラー、司会、通訳によるミーティングが行われた。堀の司会によってシンポジウムの進行の確認が行われる。午後４時に会場へ移動する。W3メンバーおよびボランティアによる会場の設営が行われ、参加者が集まりはじめる。予定よりやや遅れて、午後４時30分ごろ、シンポジウムが始まる。

司会者により、パネラーの紹介があったのち、初めに、デュエンデ、フィールドワーク・イン・藤野、ICAEEの活動が紹介された。リザベス・ビックとヨス・ファン・デァ・ポルは、デュエンデ創設、現在拠点としている学校跡の建物を、アーティストグループのアトリエとしてロッテルダム市から借り受け運営するに至る経緯、現在、ロッテルダム市が招待する海外のゲストアーティストの受け入れ活動や、デュエンデが独自に計画するゲストアーティストの招待と、彼らのレジデンスによる制作および発表のサポート、またデュエンデの企画による展覧会など活動を紹介した。デュエンデの建物の様子や、ゲストアーティストの展示の様子、デュエンデを使った展示の様子などがスライドによって紹介された。
中瀬康志からは、フィールドワーク・イン・藤野が神奈川県藤野町で毎年行っている、海外アーティストのレジデンス活動についての紹介があった。野外展示を前提としている性格上、比較的、芸術活動に対して理解のある県であるにも関わらず、自治体との交渉に伴う困難さと、彼らがさまざまな手を尽くして自治体の理解をひきだし、展示場所を確保している様子などが話された。また、住民や学生などの多数のボランティアが、アーティストの作品制作に協力している様子が、これまでの作品展示の記録とともにスライドで紹介された。
今回の主催団体であるICAEEの活動については、酒井信一から紹介があった。1991年より活動をしているICAEEの活動の中で、特に東京都内の廃校を利用して行われた91年の日本・ベルギー交流展「浅草へ」、96年の日本・オランダ交流展「〈根の回復〉として用意された〈12の環境〉」をアーティスト・イン・レジデンスによる展覧会の事例としてスライドを交えながら紹介をした。廃校を美術展の会場に利用することに対する自治体の当初の無理解と、その内容や意義を説明し、会場の提供を受けることが出来た経緯が話された。都市部の廃校利用の一例として、また、アーティストが画廊や美術館から離れて活動をする例として示した意味もあり、同様の計画が続くことを期待したが、あまり実現されていない現状にまで言及した。
それぞれのグループのプレゼンテーションが終わった後、参加者からの質疑応答が行われ、オランダと日本とでの美術を取り巻く社会状況の違いが話題となり、それぞれの団体が、具体的にどのような態度で行政や自治体、または周辺の住人とかかわり、それぞれの計画を実現してきたかを話し合った。ビックによれば、デュエンデはロッテルダム市との長期の交渉によって学校跡の建物を利用できるようになったのだが、交渉が長期化したのは、市やアーティストの態度が変わったのではなく、人口が増加し、アーティストが利用できるような古いスペースが無くなりつつあることに起因してる。また、ロッテルダム市内には、大小合わせてやく30のアーティストイニシァティブが、何らかの形でスペースを確保しており、また、その中のいくつかがデュエンデと同じようにゲストアーティストを迎え入れる環境を持っている。そして、他のイニシアティブとのネットワークを持ちながら活動をしている。

フィールドワーク　イン・藤野は、他のアーティストグループとの交流よりも、地域の住人や、他分野の人々の協力を最も大切と考えている。ICAEEでは、アーティストが自主的に企画をし、アーティスト自身が社会にかかわってゆくことが前提であるなど、それぞれの態度か述べられた。続いて、ポルから、東京での滞在制作や生活の印象などが述べられ、東京のアートシーンの分かりにくいこと、もっと一般にわかりやすいインフォメーションが必要ではないかという感想と意見がのべられた。
また、９月にデュエンデでレジデンスをし、展覧会を開催した天野豊久から、滞在制作において、デュエンデや他のアーティストイニシアティブのメンバーの協力が実に大きかったことなどが作品展示の様子を写したスライドを交えて報告された。

最後に、各団体の代表からアーティストイニシアティブの可能性に対する見解と、具体的な活動の計画が述べられた。
ICAEEの酒井からは、今回主催したパドゥルズが、ただ、芸術のグローバル化にとどまることなく、個々のアーティストの連鎖となり、新しい芸術に対する認識が生まれること、また、これが日本発の活動として発展してゆくことが、これから期待されることとして述べられた。また、今後の活動として、2001年に、再び廃校を会場とした展覧会を開催することが発表された。
フィールドワーク・イン・藤野では、現代美術に限らず他分野のアーティストとの企画や交流をしてゆくこと、来年度のパドゥルズに参加することが、今後の計画として発表された。
デュエンデのビックは、これからも継続的にアーティストや他のグループとの交流を行ってネットワークを広げてゆくこと、また、インターネットを使って、さまざまな言語で情報提供ができるようなメディアを開発してゆきたいと述べた。

午後７時、シンポジウム、終了。

## ●シンポジウムの成果

### シンポジウムの成果・自己評価

このシンポジウムの目的のひとつであった、各アーティストイニシアティブの活動紹介は、各パネラーが豊富なスライド資料を準備もあり、運営に携わるアーティストの熱意なども含めて参加者に充分伝わったと思われる。
また、これらの活動が社会に及ぼす影響は、具体的に統一的な見解は出なかったものの、自治体や住民、ボランティアらを巻き込んでそれぞれの企画を推進、実解してゆく様子から、なにがしかの影響力を実際に持っていることがわかった。しかし、それぞれのグループが他のグループとかかわることが少なく、大きな力を持ちえない日本の状況なども垣間見られた。したがって、アーティストイニシアティブの可能性としては、「連携」「ネットワーク」「他分野との交流」などのキーワードが浮き彫りにされた。そして、それぞれのグループが今後の活動の中へとフィードバックしてゆくことが期待される。
各団体の具体的な事例がスライドを交えて数多く紹介され、参加者の関心を引きつけたことは評価できる。しかし、それに伴って１パネラーのプレゼンテーションの時間がやや長くなってしまい、質疑応答や討議の時間があまり多くとれず、議論がそれほど深まらなかったことが、今回の反省点として残る。
また、開始時、会場のセッティングに手間取り、スタートか若干遅れてしまった事なども反省すべき点である。
今回のシンポジウムは、おおむね良好に終えることができた。唯一もの足りないのは、パネラー同士の討論があまりなく、意見交換のレベルで終わったことである。今後、より深い討議ができるような工夫が必要であろう。

### フォローアップの方法

パドゥルズの一環として開催されたこのシンポジウムの記録は、すべての企画が終了した後制作する予定のカタログに残される。また、次年度計画されている「アーティストイニシアティブリンクス2000／パドゥルズ」もくは再来年度における交流プログラムの具体的な企画や運営に活かされる。

なお、パドゥルズは、８月の「シドニー・ドラム／伊藤洋介展」（東京・ギャラリーサージ）を皮切りに、当シンポジウムの他、以下のスケジュールで展覧会などが開催された。

８月　「シドニー・ドラム／伊藤洋介展」（ギャラリーサージ・東京）、シンポジウム（東京）
９月　「シドニー・ドラム／伊藤洋介展」（CAS・大阪）、シンポジウム（大阪）
　　「天野豊久展」（デュエンデ・ロッテルダム）、シンポジウム（ロッテルダム）
１０月「アンケ・シェーファー展」（CAS）、「出口道吉展」（TENT ・ロッテルダム）
１１月「リザベス・ビック＋ヨス・ファン・デァ・ポル展」（ギャラリーサージ）、
　　ビック＋ポル　レクチャー（多摩美術大学）、「有地左右一＋笹岡敬展」（TENT.）
１２月「ドレイ・ワーペナー展」（ギャラリーサージ）、
　　ワーペナー　レクチャー（東京芸術大学）

文責:天野豊久

オランダでのシンポジウム（デュエンデ/ロッテルダム）